石川淳選集

第十一卷

石川淳選集　第11巻（全17巻）

1980年9月8日　第1刷発行©

¥1500

著　者　石川淳（いしかわじゅん）

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目　次

森鷗外　七
鷗外覺書　八
澀江抽齋　八
北條霞亭　一三
古い手帳から　三二
詩歌小說　五二
抒情詩風　五二
我百首とその前後　六一
追儺以後　七五
灰燼まで　八一
傍觀者の事業について　八九

翻譯概觀　八九
諸國物語　一〇一
傍觀者の位置　一一五
傍觀者の運動　一二八
大鹽平八郎　一三六
自然を尊重する念　一四六
新なる性命　一五五
あとがき　一七一
鷗外についての對話　一七五
前賢餘韻　一八七
津和野　一八八
奈良　一九六
梭羅消息　二一二
奈良再遊　二三九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

京の墓　二五二
三木竹二　三〇七

評論隨筆　一

森鷗外

鷗外覺書

澀江抽齋

「抽齋」と「霞亭」といづれを取るかといへば、どうでもよい質問のごとくであらう。だが、わたしは無意味なことはいはないつもりである。この二篇を措いて鷗外にはもつと傑作があると思つてゐるやうなひとびとを、わたしは信用しない。「雁」などは兒戯に類する。「山椒大夫」に至つては俗臭芬芬たる駄作である。「百物語」の妙といへども、これを捨てて惜しまない。詩歌翻譯の評判ならば、別席の閑談にゆだねよう。

「抽齋」と「霞亭」と、雙方とも結構だとか、撰擇は讀者の趣味に依るとか、漫然とさう答へるかも知れぬひとびとを、わたしはまた信用しない。この二者撰一に於て、撰ぶ人の文學上のプロフェッシオン・ド・フォアがあらはれるはずである。では、おまへはどうだときかれるであらう。ただちに答へる、「抽齋」第一だと。そして附け加へる、それはかならずしも「霞亭」を次位に貶すことではないと。

「抽齋」第一とは、わたしが目下立てておかねばならぬ假定である。そのうへでなければ、わたしは鷗外について一行も書き出すことができない。だが、もしわたしが鷗外論を書き出したとすれば、この假定は途中で、もしくは最後に破れるに至るかも知れない。それはわたしが書きながら發明するであらうことに屬するので、さしあたり別のはなしである。

鷗外世界といふ微分方程式を解かうとするものに對して、あたかも當の世界のはうから「抽齋」と「霞亭」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

といふ二つの答をちらちらさせてゐるかのやうなあんばいである。文學のはなしでは、答が出ただけでは市が榮えない。問題はさらにそこから發展してゆくであらう。右二篇を論ずることはただに鷗外世界を逍遙するといふことのみにはとどまらない。

年譜に依れば大正五年五十五歳、鷗外はまづ「抽齋」から探り入つてゐる。最初に意圖されたものは、武鑑捜索中に偶然出逢つた人名につき「ふと澀江氏と抽齋とが同人ではないか」と思ひ、「どうにかしてそれを確めよう」とするにあつた。元來「武鑑を檢する必要」は「文章の題材を、種々の周圍の狀況のために、過去に求めるやうになつてから」生じたのであつたが、それ以前には澀江某の名も事蹟も全然未知に屬してゐた。「わたくしの抽齋を知つたのは奇緣である」といふ。

澀江氏と抽齋と同人であることが「確め」られたとき、鷗外はさらにその人物、事蹟、生活、周圍、子孫について知らうと努めはじめる。そして、それを知りえてゆく段どりがただちにそれを書いてゆくことになる。未知のものに肉薄しようとする努力は、心がうごき、眼がうごき、手足がはたらいてゆくに應じて、もはやペンに於てしか發現できない態である。心がうごいたのには、左の事情があつた。

「抽齋は醫者であつた。そして官吏であつた。そして經書や諸子のやうな哲學方面の書をも讀み、歷史をも讀み、詩文集のやうな文藝方面の書をも讀んだ。其迹が頗るわたくしと相似てゐる。」その抽齋を先進の考證學者とみとめ、自分のためには「畏敬すべき人」と見ながら、鷗外はさらにかういふ。「然るに奇とすべきは、其人が康衢通逵をばかり歩いてゐずに、往々徑に由つて行くことをもしたと云ふ事である。抽齋は宋槧の經子を討めたばかりでなく、古い武鑑や江戸圖をも翫んだ。若し抽齋がわたくしのコンタンポランであ

つたなら、二人の袖は横町の溝板の上で摩れ合つた筈である。こゝに此人とわたくしとの間に暱(なじ)みが生ずる。わたくしは抽齋を親愛することが出來るのである。」

「暱(なじ)み」といひ、「親愛」といひ、または「かう思ふ心の喜ばしさ」といひ、または「敬慕する餘りに」といつてゐるのは、抽齋に於ける鷗外の感動の表白である。だが、そのときには、鷗外は偶然わづかに抽齋の片鱗をうかがひ知つたのみで、まだその全貌を明かにするに至らなかつたはずである。當時すでに、鷗外のうちには、自分の愛するに堪へるところの、抽齋と名づける人間像が漠然と出來上つてゐたのであらう。それは鷗外の夢想の人間像でもあり、過去に肉體と生活とをもつた實在の人間像に合體すべきものでもあつた。そのおぼろげな未完成の抽齋像に於て、鷗外がいち早く捕へた生命の息吹は自分の內部なる感動よりほかにない。自分の感動が確實だといふこと、感動した自分がげんに生きてゐるといふことが、これから探究して行くべき人間像の實在性につながる根元であつたらう。事實、鷗外はそのへんから書き出してゐる。

書き出すに當つて、事の用無用の論は意に介さない。これは他の諸作をも通じて、鷗外が終始執つて下らなかつた態度である。世評の非難し來るものに對して、ときどき辯明を試みてはゐるが、じつは輕蔑をもつて報いただけであつた。この態度を說明することばが「抽齋」本文の中にも見受けられる。

「學問はこれを身に體し、これを事に措いて、始て用をなすものである。否(しからざ)るものは死學問である。これは世間普通の見解である。しかし學藝を研鑽して造詣の深きを致さんとするものは、必ずしも直ちにこれを身に體せようとはしない。必ずしも徑(たゞ)ちにこれを事に措かうとはしない。その矻々として年を閱(けみ)する間には、心頭姑く用と無用とを度外に置いてゐる。大いなる功

績は此の如くにして始て贏ち得らるゝものである。」

鷗外の感動は怒號をもつて外部に發散してゆく性質のものではない。それはひとに知れたとき言訣をしなくてはならなかつたほど、ひつそり內部に沈潛する底のものであつたが、そこからおこつた精神の運動が展開して行つたさきは小宇宙を成就してしまつた。なにか身にしみることがあつてたちまち心あたたまり、からだがわれを忘れて乘り出してゆき、用と無用とを問はず、橫町をめぐり溝板をわたるやうに、はたへの氣兼で汚されることのない淸潔なペンがせつせとうごきはじめると、末はどんな大事件をおこすに至るか。仕合せにも「抽齋」一篇がここにある。出來上つたものは史傳でも物語でもなく、抽齋といふ人物がゐる世界像で、初めにわくわくしたはずの當の作者の自意識など影も見えない。當時の批評がめんくらつて、勝手がちがふと憤慨したのも無理はない。作品は校勘學の實演のやうでもあり新講談のやうでもあるが、さつぱりおもしろくもないしろもので、作者の料簡も同樣にえたいが知れないと、世評が內內氣にしながら匙を投げてゐたものが、じつは古今一流の大文章であつたとは、文學の高尙なる論理である。

鷗外みづから「敬慕」「親愛」と稱してゐるところの、抽齋といふ人間への愛情が作品に於てどんなはたらきをしてゐるか。鷗外はその愛情の中に自分をつかまへることに依つて書き出したのではあつたが、またその中に自分を取り落すことに依つて文章の世界を高次に築き上げてゐる。實例として、つぎの一節を揭げる。

「五郎作は文章を善くした。纖細の事を叙するに簡淨の筆を以てした。技倆の上から言へば、必ずしも馬琴、京傳に讓らなかつた。只小說を書かなかつたので、世の人に知られぬのである。これはわたくし自身の判斷

である。」

「わたくしの獲た五郎作の手紙の中に、整骨家名倉彌次兵衛の流行を詠んだ狂歌がある。臂を傷めた時、親しく治療を受けて詠んだのである。『研ぎ上ぐる刃物ならねどうちし身の名倉のいしにかゝらぬぞなき。』わたくしは餘り狂歌を喜ばぬから、解事者を以て自ら居るわけではないが、これを蜀山等の作に比するに、遜色あるを見ない。」

わたしはこれを讀んで啞然とし、茫然とし、そして心たのしかつた。なるほど二世劇神仙こと眞志屋五郎作は芝居の見巧者であり、能文の人ではあつたらう。だが、これを擧げて馬琴京傳に讓らないと斷ずるためには何の據りどころがあるのか。そもそも馬琴京傳と、性質を異にする二作者を並べてかぞへるのがすでにをかしい。小說云云に至つては、さらに滑稽、無意味である。鷗外は小說といふものを何と解してゐたのか。小說論は別としても、肝腎の五郎作の技倆がどうやらあやしいものである。といふのは、折角鷗外が推稱に努めてゐるにも係らず、右の狂歌は一見して笑ふべき駄作でしかない。表現だけを取つても、「刃物ならねど」のごとき云ひまはしは文政ぶりの俗調である。古今集の歌屑と評される「糸に縒るものならなくに」の子孫が市井に零落したやうなかたちである。さすがに天明狂歌の先達、蜀山、菅江等の作にはこんなしがないものは一つもまじつてゐない。萬載狂歌集一卷を瞥見しただけでも明瞭であらう。「遜色あるを見ない」とは、鷗外はどこを見ていつたことか。狂歌を喜ぶ喜ばないとはちがふはなしである。

鷗外は眼がきかなかつたのか。またはここで眼に雲が懸つたのか。いや、さうとは思はれない。たれにもわかる平易なことを、鷗外ほどの文人がわかりえなかつたはずがない。このとき、鷗外の眼はただ愛情に濡

れてゐたのであらう。

抽齋への「親愛」が氾濫したけしきで、鷗外は抽齋の周圍をことごとく、凡庸な學者も、市井の通人も、俗物も、蕩兒も、婦女子も、愛撫してきはまらなかつた。「わたくし自身の判斷」を支離滅裂の慘狀におとしいれてしまふやうな、あぶない橋のうへに、おかげで書かれた人物が生動し、出來上つた世界が發光するといふ稀代の椿事を現出した。そして、このおなじ地盤のうへに、鷗外は文章を書く新方法を發明したはずである。

もし鷗外の文學的生涯が「抽齋」をもつて終つたとしたらば、はなしはめでたしめでたしであつたらう。だが、その後死期に迫る五ケ年を費して、鷗外はみづから「抽齋」の位置を動搖せしめる底の奇怪なる文章を書く宿命をもつた。「北條霞亭」である。

北條霞亭

年代順では、「抽齋」の後「霞亭」の前に「伊澤蘭軒」がある。これについては別に記すに値する。だが、「霞亭」に入るに當つてまつたく「蘭軒」を飛び越えてしまふことはできない。むしろ「蘭軒」の地盤にしばらく立ちながら前後を見わたすことに依つて、幸便に「抽齋」「霞亭」兩世界の消息を探るべきであらう。ただに敍述の內容に脈絡の絕ちがたいものが存するといふやうなことではない。

「蘭軒」が書かれてゐる方法は「抽齋」の場合から踏襲されたものである。しかし、その方法を驅使するところの作者に於ける事情はちがつて來てゐる。「抽齋」を書きつつ、おそらく鷗外は初め自分の方法について無意識であつたらう。そして、書くにしたがつて次第にそれの把握をつよめて行つたであらう。すでに把握

したものを提げてつぎの仕事に乘り出したとき、「わたくしが今蘭軒を傳ふることの難きは、前に澀江抽齋を傳ふることの難かりし比では無い」やうな仔細があつたにしろ、「わたくしは先づ自己の態度を極めなくてはならない」といふ、その鷗外の態度には自信がほのめいてゐる。「抽齋」に於て發明した方法を改めて自覺することから、鷗外は「蘭軒」を書き出す糸口を見つけてゐる。

「わたくしはかう云ふ態度に出づるより外無いと思ふ。先づ根本材料は伊澤德さんの蘭軒略傳乃至歷世略傳に據るとする。これは已むことを得ない。和田さんと同じ源を酌まなくてはならない。しかし其材料の扱方に於て、素人歷史家たるわたくしは我儘勝手な道を行くことゝする。路に迷つても好い。若し進退維れ谷まつたら、わたくしはそこに筆を棄てよう。所謂行當ばつたりである。これを無態度の態度と謂ふ。」

「無態度の態度は、傍より看れば其道が險惡でもあり危殆でもあらう。しかし素人歷史家は樂天家である。意に任せて縱に行き横に走る間に、いつか豁然として道が開けて、豫期せざる廣大なるペルスペクチイウが得られようかと、わたくしは想像する。そこでわたくしは蘇子の語を借り來つて、自ら前途を祝福する。曰く水到りて渠成ると。」

ここに「無態度の態度」と呼ばれてゐるものを、鷗外はその繁華なる文學的經歷中、五十五歲以前の當世ふうの物語に於てではなく、晩年晦れたる校勘家の傳を作るに及んでさとりえたかのやうである。そして、このはなはだ小說作法的な仕方で混沌を切り開いて行つた文章を、鷗外自身は前期のいはゆる小說作品よりもはるかに小說に近似したものだとは考へてゐなかつたやうである。たしかに從來の文學的な努力とは性質のちがつた努力がはじめられてゐたにも係らず、さう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com